

### 三、学園運営の寛と厳

## 「垣間見」の記

——武田ミキ先生を想う——

西 和子

武田ミキ先生から与えられた、私の課題は『自分が役に立つ人間であるかどうか、常に謙虚な気持ちで考えてみなさい。』ということであったかと、今では確信している。

先生とは、短い御縁であった。しかし、その短さの中にあっても、先生と接した一コマ一コマに、そのお人柄が垣間見えたように思え、私の中で強烈な印象となって光を放っている。

『使いものにならない者を雇う必要はない。』

これが、間接的に耳にした、ミキ先生の、私に対する最初の言葉であった。どうやら学長は、教職経験者で大学院出の私に、事務職がつとまるだろうか、採用になる前から危惧しておられたようである。十三年間の中学校教

員生活の後、二年間、大学院でお世話になった。修了後、図書館司書へ、とのお話をいただいたの甘え心が、一度にふっとんだものだった。ミキ先生からお電話をいただいたのは、その数日後のことである。「私は、あなたをよく知りません。」に始まり、多くの問いかけがあった。予期しないことであつたので、充分にお話しできなかったというもどかしさが残つた。翌日、意を決して学長室のドアをノックした。先生は、終始穏やかに、そして熱心に、私の表情・言葉を、見つめ、聞いてくださったように思う。「一からやり直したいのです。」という私の言葉に、しきりに頷かれ最後に、健康状態を尋ねられ、「お大事に。」とのお言葉で、四〇分間の「面接」は終了したのである。

図書館司書としての日々の勤めの中では、ミキ先生との直接の対話は稀であつたが、ある時、久しぶりに姿をお見掛けしたので、御挨拶すると、呼びとめられて、「休みが多すぎる。」とのお小言。自動車学校の学科試験や実技試験が日中にあるので、どうしても年休をとらなければならなかつたのである。そう申し上げても、「とにかく休みすぎる。」と繰り返されるのみ。こちらには、内心、免許をとれば、朝の早い出勤や、頻繁な郵便局への用務も可能になるのだから、との思いがあるものだから、納得できないまま、「すみません。」と申し上げた。すると、ミキ先生、「年休は、病気の時のためにとっておくものですよ。」とおっしゃつたものである。理不尽なお小言を頂戴したものだ。めつたにお会いしないのに、名まえを呼んでくださったぞ。いつ、どうなるかわからないのだと健康上のことを気にかけてくださったのだ。などと、さまざまな思いが交錯して、でも、後になるほど、ほのぼのとした、静かな喜びで占められるようになっていった。

また、決裁をいただいた差引簿に、鉛筆書きのメッセージが添えられることもあつた。「もつと読みやすい字を書きなさい」とあるのを見た時は、注意深く書いているのに、どうして?などと素直になれなかつた。後によく見

ると、なるほど、クセ字で読みづらい。申し訳のないことであつた。「小さいお子さんがおられるのに大丈夫ですか」、これは、二泊三日の図書館研究大会出席の伺い書を提出した際のものである。二泊三日の出張は贅沢とおっしゃっているのだろうか、と、うがった読み方をしてしまったが、後で思えば、先生は、「母」としてのあり方を問うておられたのだ。

垣間見たミキ先生の中に、厳しさだけが感じられ、その内に込められた、先生の本当の優しさ、ゆらぐことのない信念を認めることができるようになるためには、少し時間がかかった。司書としての最初の一年間の頑張りには、あの『使いものにならん者』との評価に反発することの上に成り立っていた。いわば、他者との闘いであつた。それが、次第に、自己との闘いに移行していった。自分が優れた者でないことは、充分知っていたつもりなのに、どこかに、まだ、思い上がった気持ちがあつたから、あれほどの反発心を抱いたのだと気付いたからであつた。毎日のトイレの掃除や、一寸した人のお世話にも恩きせがましい心があつた。そういった醜い自分と向い合わせてくださったのだと気付いた時、先生の言われる「謙虚さ」と「優雅さ」の真の意味が理解でき、その目指すところの深きを知つたのである。

#### エピソード

年末ということ、特に念入りにハタキをかける手が、一冊の本の上で止まつた。いただいたまま、我家の本棚の装飾品となつてしまつていたその本のタイトルは、『武田ミキ人間教育論』。作業を完全に中断して、読み進んで

いくその中には、私の知らないミキ先生の克明な姿があった。なぜ、もっと早く知ろうとしなかったのか。なぜ、少しを知って全てを知ったつもりになっていたのだろう、と大きな後悔の念がフツフツと湧きあがった。そして、御用納めや、仕事始めの御挨拶では今までとは一層違った心で、目で、先生に接することができるように強く感じた、一九九三年十二月二十六日、月曜日の午後であった。

皮肉なことに、先生の訃報に接したのは、その翌朝のことであった。

「知った時が、わかった時がお別れとは……」とり返しのつかない悔しさの日々である。